

編集委員会便り

本誌の編集委員会は2ヶ月に1度開催されている。開催の場所は事務局のある帽子会館の会議室を使用する場合もあるが、事務局から比較的近い大阪科学技術センターとか、ユニチカ保健会館、最近では大阪大学工業会館が良く使用されている。この大阪大学工業会館は四ツ橋筋をはさんで毎日新聞社の向いにそり立つ近代的な高層ビル「近鉄堂島ビル」の最上階20Fにある。この会議室からは広い大阪の眺望ができる。大阪のど真中に工業会館など保有している大阪大学に驚きと敬意を表している次第である。

この工業会館で、第63年度第3回編集委員会が8月18日開催された。例年になく涼しい夏なのにこの日に限って夏本番を思わせる暑気であった。淀屋橋駅を出るとばったり林委員長と会う。「歩いても良いがこの暑さではタマランな」と言う事になりタクシーで3分もかからず会場へ走り着く。工業会館はやはり涼しかった。

編集委員会は20人（大変高い出席率）で午後3時より始まった。当日の主要案件は、諸報告と会誌11月号、会誌来年度（第10巻）1月号、3月号に関するものと3月号以後の特集案である。

諸報告では一般に、(1)最近発行した会誌の発行状況、(2)常任理事会関係、(3)企画実行委員会関係、(4)研究論文、一般原稿の投稿状況などが委員長や事務長より報告される。

会誌に関しては、発行する早い号から順に原稿の集り具合や、執筆予定者の承諾状況が事務長から報告があり、種々の問題について討議し処置をすることになる。問題は予定した執筆者から承諾が得られない場合、

又承諾は得たけれども忙しく執筆不可能となり会誌発行に間に合わない場合、さらに原稿は届いたけれど基準頁の2倍位も長い場合などさまざまである。会誌は1号はほぼ100頁を目標に編集されているが、全く対処できない場合は減ページのままで発行したり、又長過ぎて止むを得ない原稿は著者とも相談し2つに分けて掲載した事もある。とにかく、現在編集委員会では半年先の号のテーマと執筆者など内容を決定し、又編集の中心となる特集記事はさらに半年先の号までを検討している所である。

ところで8月18日の編集委員会、いやに進行が速い。「今後の特集案」では各委員から多くの案が出揃った。なお、当日内容を決定した来年3月号（第10巻2号）の特集案は「核エネルギー利用技術の進歩」である。委員会で頭を暑くし、外の猛暑と重なったので委員長の発案でビールにてノドを潤し閉会となった。

なお本号（第9巻、6号）には「非金属廃棄物の再資源化」を特集した。すでに本誌第7巻、3号には「金属廃棄物の資源としてのサイクル化」と題して、Co、Crなど特殊金属、金・銀、アルミニウム、鉛、水銀、タングステン、及び自動車スクラップからの金属などについて再資源化を特集した。この続編として今回は非金属の再資源化を大阪ガスの磯谷委員と共に企画した。この企画に際しては京大工学部衛生工学科の平岡教授に、御自身の御執筆の他全体の内容につき貴重な御意見・御協力を賜った。ここに御礼申し上げる次第である。

若松 貴英

京都大学工学部 資源工学教室教授

